日本語と英語の読解方略使用の比較

北海道立札幌工業高等学校　教諭　松本 広幸

概要　習熟度が低い第二言語（L2）の読解プロセスは第一言語（L1）の読解プロセスとは異なると，先行研究で報告されている。本研究では，日本語と英語の読解方略使用について質問紙調査を行い，両者を量的に比較した。結果として，(1) 習熟度が低い英語の読解方略使用量は日本語の読解方略使用量よりも小さかったが，(2) 英語の読解方略使用量パターンは日本語の読解方略使用量パターンと類似し，(3) 英語における読解方略使用の関係性は日本語における読解方略使用の関係性と差はなかった。これらの結果は先行研究と一致しない面もあるので，この点も含めて検討した。また，本研究は，読み手が用いる読解方略の組み合わせについてもその概略を提供している。

1 はじめに

読解方略の研究は，学習者の読解力向上をめざすためだけではなく，読解プロセス自体を解明するためにも行われてきた（Block, 1986; Carrell, 1989）。後者を目的とした研究（Block, 1992; Davis & Bistodeau, 1993; Donin & Silva, 1993; Horiba, 1996）は，主に発話プロトコル(注1)の分析を通して，L1 と L2 における限定的な読解方略使用を比較した。これらの研究結果は，習熟度が高い L2 の読解方略使用は L1 の読解方略使用と似ているのに対して，習熟度が低い L2 の読解方略使用は L1 の読解方略使用とは異なることを示した。包括的な読解方略使用の比較は，主として質問紙調査を通して実施された。Sheorey and Mokhtari（2001）及び Mokhtari and Reichard（2004）は，自ら開発した質問紙を用いて，習熟度が高い L2 学習者の読解方略使用と L1 話者の読解方略使用を比較した。結果として，両者の読解方略使用には類似したパターンが見られた。本研究では，これらの先行研究を踏まえ，習熟度が低い L2 の読解方略使用と L1 の読解方略使用について，質問紙を用いた包括的な比較を行った。

また，読解方略使用の関係性，つまり読み手が用いる方略の組み合わせ及びその強さや大きさ，についての先行研究は十分とは言えない。Eskey and Grabe（1988）によると，一般的な読み手がどのようにボトムアップ処理とトップダウン処理を組み合わせているのかは明確ではなく，まして個々の読み手の差異に関してはほぼ研究されていない。この点についても，本研究はその概略を提供している。

2 背景と目的

読解方略研究には，読解プロセスの解明を図る研究的側面と読解力の向上をめざす教育的側面がある。それぞれの前提は，読み手が用いる読解方略は内的な読解プロセスを反映すること（Block, 1986; Carrell, 1989），読解方略の効果的使用は読解力の向上をもたらすこと（Barnett, 1988; Grabe, 1991; Kern, 1989）である。読解プロセスを解明するために，L1 及び L2 における発話プロトコルや質問紙調査結果が比較された。結果の概略として，習熟度が比較的高い L2 の読解方略使用は L1 の読解方略使用と類似しているが，習熟度が低い L2 の読解方略使用は L1 の読解方略使用とは異なる。

発話プロトコルの分析による限定的な読解方略使用の比較について，以下に結果概要をまとめる。Block（1992）は，指示語の内容特定と未知語の意味推測に関するモニタリングを比較した。結果とし

て，習熟度が高い L2 のモニタリングは L1 のモニタリングと類似していたが，習熟度が低い L2 のモニタリングは L1 のモニタリングとは異なった。Davis and Bistodeau （1993）は，ボトムアップ方略とトップダウン方略の使用比率を比較した。結果として，習熟度が高い L2 での使用比率は L1 での使用比率に近かったが，習熟度が低い L2 での使用比率は L1 での使用比率とは異なった。Donin and Silva（1993）はテキスト内容の推測について比較したが，習熟度が中程度の L2 における推測パターンは L1 における推測パターンと類似していた。Horiba（1996）は，前方（predictive）推測，後方（backward）推測，及び精緻化（elaborative）推測の 3 領域で比較を行った。結果として，これらの 3 領域において，習熟度が高い L2 の推測は L1 の推測に近かったが，習熟度が中程度の L2 の推測は L1 の推測とは異なった。これらの研究結果を総合すると，読解方略使用の差異は L1 と L2 の区分によるものではなく，習熟度の違いにより生じると判断される。

質問紙調査による包括的な読解方略使用の比較について，以下に結果概要をまとめる。Sheorey and Mokhtari（2001）は，認知的（cognitive）方略，メタ認知的（metacognitive）方略，補助的（supportive）方略についての比較を行った。結果として，補助的方略を除いて，習熟度が高い L2 の認知的及びメタ認知的方略使用は，L1 の認知的及びメタ認知的方略使用とそれぞれ類似していた。Mokhtari and Reichard（2004）は，全体的（global）方略，問題解決的（problem-solving）方略，補助的方略についての比較を行った。結果として，習熟度が高い L2 の方略使用は， 3 つの範疇（はんちゅう）すべてにおいて L1 の方略使用と類似していた。

これらの先行研究の結果から，本研究においては次の研究仮説を設定して，習熟度が低い L2 の読解方略使用と L1 の読解方略使用を包括的に比較した。

仮説 1	英語における読解方略使用量は，日本語における読解方略使用量よりも小さい。
仮説 2	英語における読解方略使用量パターンは，日本語における読解方略使用量パターンとは異なる。
仮説 3	英語における読解方略使用の関連性は，日本語における読解方略使用の関連性よりも弱い。

3 調査方法

3.1 調査対象者

調査対象者は，外国語としての英語教育を受けている高校 2 年生約300人である。概して，英語に対する学習意欲は低くはないが，習熟度については決して高いとは言えない。具体的には，実用英語技能検定 3 級に一部の生徒が合格しているが，他の生徒はそのレベルにわずかに達していない。

3.2 質問紙

本研究の読解方略質問紙は，Sheorey and Mokhtari（2001）中の方略を中心に，Pressley and Afflerbach（1995）からも方略を取捨選択して項目を立てた（資料参照）。Pressley and Afflerbach（1995）は，L1 においてプロトコル分析を行った多数の研究を整理して，その中の読解方略を網羅的に提示した。つまり，本研究の読解方略質問紙中の方略はすべて L1 からの抽出であるので，必然的に L1 の読解プロセスを反映していることになる。また，各方略間の関連性についてもある程度説明できるので，内容及び構成概念妥当性についてある程度確保されている（Matsumoto, 2005）。なお，内的整合性についてもほぼ十分であった。表 1 は，読解方略質問紙の構成を示している。

■ 表1：読解方略質問紙の構成

1　重要語の意味を結び付ける（Key words）
2　語句の意味的まとまりに注意する（Meaningful units）
3　段落ごとに主題文を探す（Topic sentences）
4　難しい箇所を自分の言葉で置き換える（Paraphrasing）：日本語
4　難しい箇所を日本語に訳す（Translating）：英語
5　重要な箇所や難しい箇所を再度注意して読む（Re-reading）
6　情報や関連性を求めて文章中を行き来する（Back and forth）
7　基本的に文構造をヒントとして活用する（Sentence structure）
8　文章タイプや構造に注意する（Global structure）
9　談話標識に注意する（Discourse markers）
10　事前に内容に目を通す（Pre-reading skimming）
11　表題，図表，絵や写真などに注意する（Comprehension aids）
12　文章中の情報を自分の知識と関連付ける（Content schema）

13 文章タイプや構造の知識を活用する
（Formal schema）
14 文章内容の理解を主目的とする
（Reading for meaning）
15 文章内容の理解度を把握する
（Monitoring comprehension）
16 次の内容展開を予測する（Forward inferences）
17 予測と実際の内容が異なれば修正する
（Modifying inferences）
18 読んで理解できなかった箇所を後から推測する
（Backward inferences）
19 知らない語句の意味を推測する
（Guessing meaning）
20 主題と細部を区別する（Differentiating main ideas）
21 さまざまな情報を心の中で整理する
（Organizing information）
22 理解の難しい箇所を自分なりに解釈する
（Interpreting information）
23 読み終わったら内容をまとめる
（Post-reading summarization）

3.3 実施手順

調査対象者に対して，約 3 か月の間隔を空けてクラス単位で質問紙調査を実施した。2005年 4 月に日本語読解について調査を行い，その後 7 月に英語読解について調査を行った。質問紙調査は基本的に報告者が実施したが，一部について教科担当者に依頼した。調査対象者には，各項目について「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 5 段階評定で回答を求めた。なお，責任ある回答を促すために質問紙には記名してもらい，同時に回答に正誤はない旨を説明した。回答時間は制限しなかったが，それぞれの調査に約10分を要した。

3.4 データ分析

5 段階評定での各項目への回答はすべて間隔尺度として扱い，各評定間の間隔が等しいことを統計的前提とした。また，データから分析される中心傾向が調査対象者の全体的状況を表すことも，あわせて前提とした。なお，データ分析には SPSS 及び AMOS を使用した。各研究仮説に対するデータ分析法の概要は，次のとおりである。

(1) 各読解方略使用量を比較するために，*t* 検定を行った。有意確率が 5 パーセント以下の場合，統計的に有意であると判断した。

(2) 読解方略使用量パターンを比較するために，まずバリマックス回転 (注2) による探索的な主因子分析 (注3) を日本語読解データに対して実施した。次に，抽出された各因子における読解方略使用量の平均値を比較した。

(3) 読解方略使用の関係性を比較するために，各因子を潜在変数 (注4) として共分散構造分析 (注5) を行った。また，日本語読解と英語読解の同時分析を行い，潜在変数間の関係の差を表す統計量を算出した。この統計量の絶対値が1.96以上の場合，5 パーセント水準で有意であると判断した。

4 結果と考察

4.1 各読解方略使用量の比較

表2は，各読解方略使用量の *t* 検定結果のまとめである。結果として，日本語読解と英語読解の間で方略使用量の平均値に差があり，すべての読解方略使用量において有意差が見られた。これらの結果により，研究仮説 1 は肯定される。すなわち，習熟度が低い英語の読解方略使用量は，日本語の読解方略使用量よりも小さい。これは，習熟度が低い L2 の読解方略使用は L1 の読解方略使用と異なるという報告（Block, 1992; Davis & Bistodeau, 1993; Donin & Silva, 1993; Horiba, 1996）と一致する。

4.2 読解方略使用量パターンの比較

表 3 は，日本語読解データに対する因子分析結果のまとめである。KMO 測度 (注6) は .848で，観測変量の妥当性を示している。また，球面性検定の確率 (注7) は .000で，観測変量間の関係性の存在を示している。すなわち，この因子分析を行うことに十分な意味があると判断される。結果として，初期の固有値1.0以上 (注8) の 6 因子が抽出された。因子負荷量の大きさから，各因子を (1) テキスト操作，(2) 大意の理解，(3) 意味の構築，(4) 読解補助，(5) 推測的操作，(6) 検索行動とした。

表 4 は，各因子における読解方略使用量の平均値である。個々の読解方略使用量の差を反映して，すべての因子において，日本語読解の平均値は英語読解の平均値を上回った。図 1 は，これらの平均値をレーダーチャート化して比較したものである。結果として，日本語読解と英語読解間で方略使用量パターンの差異は見られなかった。これによって，研究仮説 2 は否定される。すなわち，習熟度が低い英語の読解方略使用量パターンは，日本語の読解方略使用

■ 表 2：各読解方略使用量の *t* 検定結果のまとめ

読解方略	L1 / L2	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
1　Key words	日本語	3.06	1.01	13.176	.000
	英　語	2.05	.89		
2　Meaningful units	日本語	2.79	.85	11.070	.000
	英　語	1.95	.92		
3　Topic sentences	日本語	2.95	.94	10.943	.000
	英　語	2.09	1.02		
4　Paraphrasing / Translating	日本語	3.22	1.20	2.326	.020
	英　語	3.00	1.14		
5　Re-reading	日本語	3.56	1.06	10.006	.000
	英　語	2.65	1.19		
6　Back and forth	日本語	3.32	1.02	12.422	.000
	英　語	2.26	1.09		
7　Sentence structure	日本語	2.57	.99	3.141	.002
	英　語	2.31	1.08		
8　Global structure	日本語	2.92	.88	16.193	.000
	英　語	1.80	.84		
9　Discourse markers	日本語	2.94	.93	8.325	.000
	英　語	2.26	1.09		
10　Pre-reading skimming	日本語	2.88	1.12	5.868	.000
	英　語	2.35	1.12		
11　Comprehension aids	日本語	3.25	1.08	6.821	.000
	英　語	2.66	1.08		
12　Content schema	日本語	2.96	.93	9.600	.000
	英　語	2.21	1.03		
13　Formal schema	日本語	2.68	.90	12.288	.000
	英　語	1.79	.91		
14　Reading for meaning	日本語	2.80	.90	6.445	.000
	英　語	2.27	1.12		
15　Monitoring comprehension	日本語	2.48	1.02	9.138	.000
	英　語	1.77	.92		
16　Forward inferences	日本語	3.29	.99	11.626	.000
	英　語	2.33	1.05		
17　Modifying inferences	日本語	2.77	1.02	10.850	.000
	英　語	1.91	.94		
18　Backward inferences	日本語	2.99	1.00	12.244	.000
	英　語	2.04	.93		
19　Guessing meaning	日本語	3.00	.99	8.512	.000
	英　語	2.29	1.07		
20　Differentiating main ideas	日本語	2.73	1.01	10.733	.000
	英　語	1.90	.90		
21　Organizing information	日本語	2.98	.96	13.353	.000
	英　語	2.00	.86		
22　Interpreting information	日本語	3.41	1.03	8.861	.000
	英　語	2.65	1.09		
23　Post-reading summarization	日本語	3.11	1.02	13.083	.000
	英　語	2.08	.93		

（注）調査対象者数　310人（日本語読解），305人（英語読解）

■ 表 3 ：日本語読解における因子分析結果のまとめ

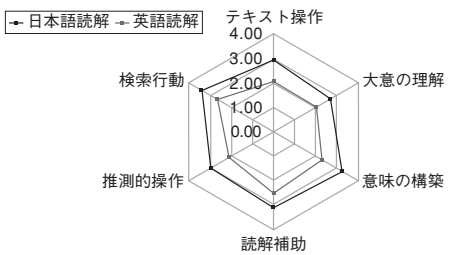
読解方略	第 1 因子 テキスト操作	第 2 因子 大意の理解	第 3 因子 意味の構築	第 4 因子 読解補助	第 5 因子 推測的操作	第 6 因子 検索行動
9 Discourse markers	**.775**	.151	.094	.014	.108	.136
1 Key words	**.627**	.115	.071	.142	.016	.156
8 Global structure	**.520**	.149	.153	.061	.151	-.052
12 Content schema	**.511**	.127	.277	.310	.057	.109
2 Meaningful units	**.501**	.209	.111	.048	-.045	.324
3 Topic sentences	**.431**	.387	-.224	.041	.142	.284
15 Monitoring comprehension	.008	**.583**	.074	.179	.168	.067
14 Reading for meaning	.251	**.520**	.196	.077	.038	.033
13 Formal schema	.219	**.446**	.094	.122	.058	.220
7 Sentence structure	.267	**.404**	.154	.189	.037	.123
20 Differentiating main ideas	.284	**.388**	.062	.017	.331	.066
23 Post-reading summarization	.168	.201	**.646**	.196	.161	.073
22 Interpreting information	.150	-.042	**.547**	.081	.202	.276
21 Organizing information	.185	.337	**.468**	-.025	.177	.074
16 Forward inferences	.042	.239	**.419**	.172	.278	.256
10 Pre-reading skimming	.080	.279	.070	**.697**	.016	.007
11 Comprehension aids	.146	.082	.100	**.636**	.079	.091
17 Modifying inferences	.044	.186	.254	.125	**.539**	.078
18 Backward inferences	.084	.223	.352	-.076	**.537**	.165
19 Guessing meaning	.394	-.048	.125	.327	**.441**	.280
5 Re-reading	.156	.121	.103	.009	.054	**.458**
6 Back and forth	.024	.288	.114	.067	.078	**.451**
4 Paraphrasing	.204	-.094	.185	.105	.233	**.393**
因子寄与	2.571	1.881	1.644	1.323	1.197	1.156
因子寄与率	11.179%	8.176%	7.149%	5.752%	5.204%	5.028%

（注）KMO = .848, Bartlett's p =.000.

■ 表 4 ：各因子における読解方略使用量の平均値

L1 / L2	テキスト操作	大意の理解	意味の構築	読解補助	推測的操作	検索行動
日本語読解	2.93	2.65	3.20	3.07	2.92	3.37
英語読解	2.06	2.01	2.27	2.51	2.08	2.64

▼ 図 1 ：読解方略使用量パターンの比較

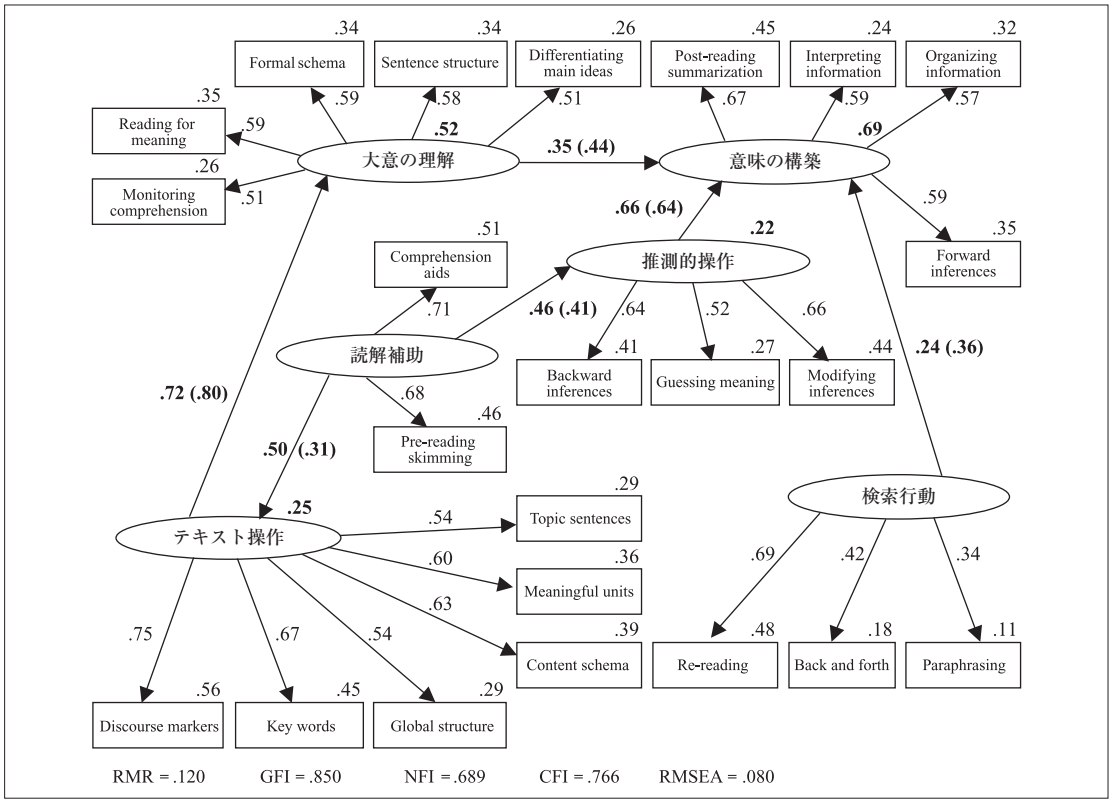


量パターンと類似している。この結果は，習熟度が低い L2 の読解方略使用は L1 の読解方略使用と異なるという報告と一致しない。

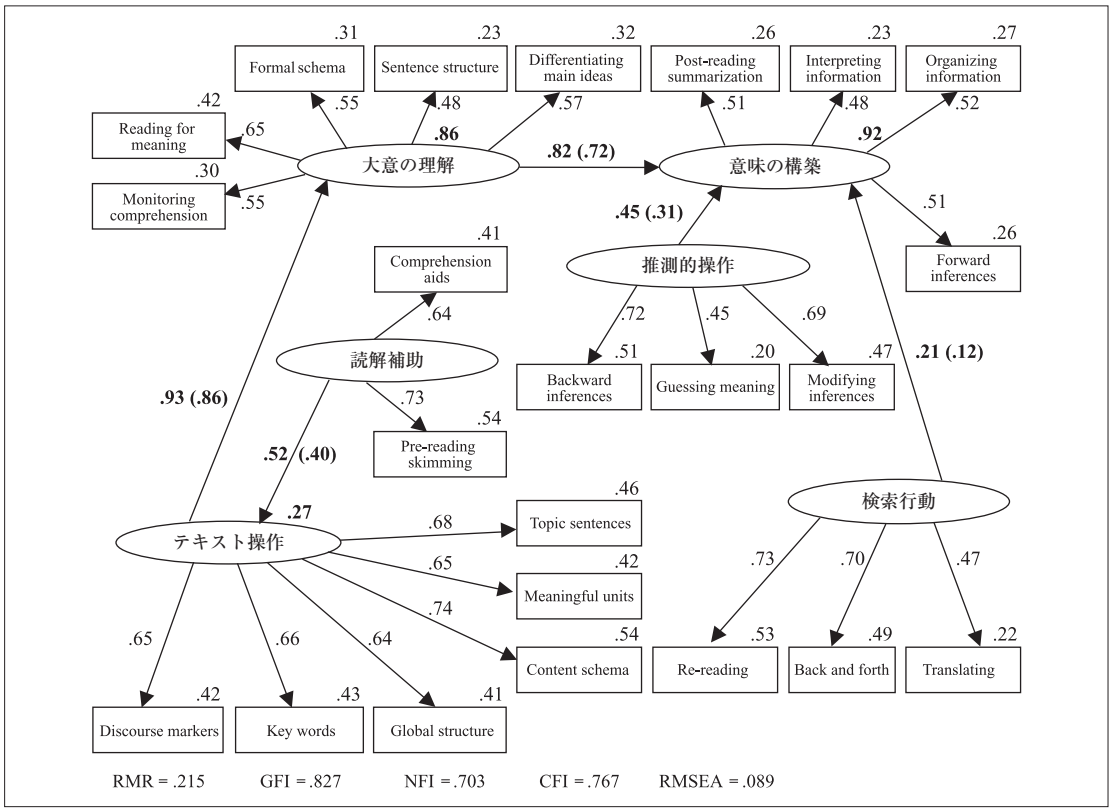
4.3 読解方略使用の関連性の比較

図 2 と図 3 は，それぞれ日本語読解と英語読解についての共分散構造分析の結果である。矢印は関係の方向性を示し，関係の強さを表す標準化係数が付随している。なお，因子間の矢印には，関係の大きさを表す非標準化係数を括弧内に併記している。また，矢印を受ける内生変数は，他の変数によって説明される程度を表す r 2乗値を伴っている。因子間のワルド統計量の確率 (注9) はすべて 1 パーセント以下であったので，因子間に関連性のあることが確認さ

▼図２：日本語読解についての共分散構造分析結果のまとめ



▼図３：英語読解についての共分散構造分析結果のまとめ



れた。

結果を比較すると，日本語読解においてよりも英語読解において，「テキスト操作」から「大意の理解」を経て「意味の構築」に至る関連性が強かった。反対に，「推測的操作」から「意味の構築」への関連性については，日本語読解の方が強かった。なお，解が無効となり計算処理できないので，英語読解においては「読解補助」から「推測的操作」への関連性を規定していない。

構築モデルと実証データの適合度に関して，本研究で構築されたモデルは，全体として適合度の下限よりも上限に近かった。RMR 及び RMSEA は .000 に近いほど当てはまりがよいのに対して，GFI，NFI，CFI は1.000に近いほど当てはまりがよい(注10)。つまり，本研究で構築されたモデルは，実証データに対してある程度適合している。しかし，日本語読解と英語読解の間で，適合度の差は認められなかった。

表 5 は，因子間の関係の差についての検定結果である。「大意の理解」から「意味の構築」への関係，及び「推測的操作」から「意味の構築」への関係において，有意差が見られた。この結果は，前者の関連性は英語読解の方が強く，後者の関連性は日本語読解の方が強いことを示している。他の因子間の関係では有意差が見られなかったので，これらの関連性について日本語読解と英語読解に差はないと判定される。

■ 表 5 ：因子間の関係の差についての検定結果

因子間の関係			統計量	有意差
テキスト操作	→	大意の理解	-1.479	×
大意の理解	→	意味の構築	-3.188	○
読解補助	→	テキスト操作	-.602	×
推測的操作	→	意味の構築	2.992	○
検索行動	→	意味の構築	1.599	×

これらの結果を総合的に判断すると，研究仮説 3 は否定される。すなわち，習熟度が低い英語の読解方略使用の関連性は，日本語の読解方略使用の関連性と差はない。この結果は，習熟度が低い L2 の読解方略使用は L1 の読解方略使用と異なるという報告と一致しない。

5 まとめと課題

研究仮説 1 に関して，習熟度が低い英語の読解方略使用量は，日本語の読解方略使用量よりも小さかった。研究仮説 2 に関して，習熟度が低い英語の読解方略使用量パターンは，日本語の読解方略使用量パターンと差はなかった。研究仮説 3 に関して，習熟度が低い英語の読解方略使用の関連性は，日本語の読解方略使用の関連性と差はなかった。先行研究では，読解方略使用の差異は主に習熟度の違いにより生じるので，習熟度が低い L2 の読解方略使用は L1 の読解方略使用と異なると報告されている。読解方略使用量の大きさに関して，本研究の結果は先行研究と一致する。しかし，読解方略使用量パターンと読解方略使用の関連性において，本研究の結果は先行研究と一致しない。

このことについて，２つの解釈が可能であろう。１つは，習熟度が違っても読解プロセス自体は類似しているという解釈である。たとえ読解方略使用量に差があっても，読解方略使用量パターン及び読解方略使用の関連性に差がないので，基本的な読解プロセスに差はないと解釈できる。この解釈は，言語相互依存仮説（Bernhardt & Kamil, 1995; Carrell, 1991; Lee & Schallert, 1997）によって裏打ちされる。この仮説によると，読解プロセスは特定の言語によらない普遍性を持つとされる。また，Fitzgerald（1995）は，L2 の読解プロセスについての先行研究を大規模に分析評価した。この評価によると，L2 の読解プロセスは基本的に L1 の読解プロセスと同様であるとされる。しかし，習熟度が違っても読解プロセスは基本的に類似しているという解釈は，習熟度が低い L2 の読解方略使用は L1 の読解方略使用と異なるという報告（Block, 1992; Davis & Bistodeau, 1993; Donin & Silva, 1993; Horiba, 1996）とは相容れない面もある。

もう１つの解釈として，日本語読解の習熟度があまり高くはなかったので，日本語と英語の読解方略使用の差異が顕在化しなかったとも考えられる。つまり，調査対象者の日本語読解と英語読解の習熟度は同じではないので，それが読解方略使用量の差となって顕在化した。しかし，相対的に高い日本語読解の習熟度は，読解方略使用量パターンや読解方略使用の関連性に差を生じさせるためには，十分では

なかった可能性がある。この解釈においては，読解方略使用の差異は習熟度の違いにより生じるという先行研究と矛盾しない。

本研究の結果に対する解釈の妥当性について，現時点での判断は難しい。この点を踏まえると，L1 と L2 の習熟度が明確に異なる被験者に対して，質問紙調査を実施する必要があるであろう。あわせて，質問紙項目の検討や分析方法の工夫，複数のインストルメントの併用など，研究方法の面でも改善の余地があると思われる。

また，本研究は，読み手が用いる読解方略の組み合わせについてもその概略を提供している。読み手がどのように方略を組み合わせて読解を行っているのかについて，先行研究では明確に報告されていない（Eskey & Grabe, 1988）。読解方略の指導を行う際には，一般的な方略が全体としてどのように協働しているのかを示す必要がある。

さらに，読解方略質問紙への回答には，学習者に対する意識付けという教育的側面もある。学習者が読解プロセスを適切にとらえるように，読解方略質問紙を活用することも重要である。

謝　辞

最後に，貴重な研究機会を与えてくださいました，（財）日本英語検定協会並びに選考委員の先生方に，心より感謝申し上げます。特に大友賢二先生には，大変示唆に富むご助言をいただきました。また，調査に協力してくれた高校生諸君にも，厚くお礼申し上げます。

注

(1) 被験者が読解タスクを行う際に，思考プロセスを報告する言語データを指す。
(2) 因子軸の回転方法の1つで，因子ごとに負荷量のばらつきを大きくするという特徴があり，広く利用されている。
(3) 因子の抽出方法の 1 つで，各因子寄与が最大になるように抽出を行うオーソドックスな方法である。
(4) 実測値として直接観測できない変数で，モデル構築時に仮定される構成概念として扱われる。
(5) 構成概念間の因果関係を調べる手法で，現在広く利用されている。
(6) 因子分析で扱う観測変量の妥当性を示し，1 に近いと因子分析を行うのは適切であると判断される。
(7) 有意確率 .05以下で 0 ではない共分散の存在を示すので，観測変量間に関連性があると判断される。
(8) 因子数を決定する際の基準の 1 つで，一般的に採用されている。
(9) 有意確率 .05以下で係数が 0 ではないことを示すので，因子間に関連性があると判断される。
(10) 一般に，RMSEA の値が .05未満の場合モデルの当てはまりがよいと判断し，.05から .10の範囲はグレーゾーンとされる。GFI，NFI，及び CFI に関しては，.90以上で当てはまりがよいと判断することが多い。

参考文献（＊は引用文献）

＊Barnett, M.A.（1988）. Reading through context: How real and perceived strategy use affects L2 comprehension. *The Modern Language Journal,* 72, 150-162.
＊Bernhardt, E.B., & Kamil, M.L.（1995）. Interpreting relationships between L1 and L2 reading: Consolidating the linguistic threshold and the linguistic interdependence hypotheses. *Applied Linguistics,* 16, 15-34.
＊Block, E.（1986）. The comprehension strategies of second language readers. *TESOL Quarterly* 20, 463-494.
＊Block, E.（1992）. See how they read: Comprehension monitoring of L1 and L2 readers. *TESOL Quarterly* 26, 319-343.
＊Carrell, P.L.（1989）. Metacognitive awareness and second language reading. *The Modern Language Journal,* 73, 121-134.
＊Carrell, P.L.（1991）. Second language reading: Reading ability or language proficiency?. *Applied Linguistics,* 12, 159-179.
＊Davis, J.N., & Bistodeau, L.（1993）. How do L1 and L2 reading differ? Evidence from think aloud protocols. *The Modern Language Journal,* 77, 459-472.
＊Donin, J., & Silva, M.（1993）. The relationship between first- and second-language reading comprehension of occupation-specific texts. *Language Learning,* 43, 373-401.
＊Eskey, D.E., & Grabe, W.（1988）. Interactive models for second language reading: Perspectives on instruction. In P.L. Carrell, J. Devine, & D. Eskey（Eds.）*Interactive approaches to second language reading*（pp.223-238）. Cambridge University Press.
＊Fitzgerald, J.（1995）. English-as-a-second-language learners' cognitive reading processes: A review of research in the United States. *Review of Educational Research,* 65, 145-190.
＊Grabe, W.（1991）. Current developments in second language reading research. *TESOL Quarterly* 25,

357-406.
*Horiba, Y. (1996). Comprehension processes in L2 reading: Language competence, textual coherence, and influences. *Studies in Second Language Acquisition,* 18, 433-473.
*Kern, R.G. (1989). Second language reading strategy instruction: Its effects on comprehension and word inference ability. *The Modern Language Journal,* 73, 135-149.
*Lee, J.W., & Schallert, D.L. (1997). The relative contribution of L2 language proficiency and L1 reading ability to L2 reading performance: A test of the threshold hypothesis in an EFL context. *TESOL Quarterly,* 31, 713-739.
*Matsumoto, H. (2005). *A study on the formation of interactive reading conception as a facilitator to interactive reading performance*. Unpublished doctoral dissertation, Hokkaido University.
*Mokhtari, K., & Reichard, C. (2004). Investigating the strategic reading processes of first and second language readers in two different cultural contexts. *System,* 32, 379-394.
*Pressley, M., & Afflerbach, P. (1995). *Verbal protocols of reading: The nature of constructively responsive reading*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
*Sheorey, R., & Mokhtari, K. (2001). Differences in the metacognitive awareness of reading strategies among native and non-native readers. *System,* 29, 431-449.

資料：読解方略質問紙

＊括弧内の英語表記は，実際の質問紙中に含まれない。
＊実際の質問紙は，日本語読解用と英語読解用に別々に構成されている。

＿＿＿学年＿＿＿組＿＿＿番　　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

日本語 / 英語の読解についての質問に，５段階評定で回答してください。なお，回答に正誤はないので，客観的に答えるように努力してください。

評定１「全く当てはまらない」
評定２「あまり当てはまらない」（半分より下）
評定３「少し当てはまる」（半分程度）
評定４「大体当てはまる」（半分より上）
評定５「非常に当てはまる」

1. 重要語の意味を結び付けている。[　　]（Key words）
2. 語句の意味的まとまりに注意している。[　　]（Meaningful units）
3. 段落ごとに主題文を探している。[　　]（Topic sentences）
4. 難しい箇所を自分の言葉で置き換えている。[　　]（Paraphrasing：日本語）
4. 難しい箇所を日本語に訳している。[　　]（Translating：英語）
5. 重要な箇所や難しい箇所をもう一度注意して読み返している。[　　]（Re-reading）
6. 必要な情報を得たり前後関係を明らかにするために，文章中を行ったり来たりしている。[　　]（Back and forth）
7. 文の主述関係のような，基本的文構造をヒントとして活用している。[　　]（Sentence structure）
8. 物語や論説などの文章タイプ，及び物語展開や段落構成などの文章構造に注意している。[　　]（Global structure）
9.「要するに」や「例えば」のような，文章構造の関係を示す語句に注意している。[　　]（Discourse markers）
10. 読み始める前に，文章全体がどのような内容なのか目を通している。[　　]（Pre-reading skimming）
11. 表題，図表，絵や写真などに注意している。[　　]（Comprehension aids）
12. 文章中の情報を自分が既に知っていることに関連付けている。[　　]（Content schema）
13. 文章タイプや文章構造の知識を活用している。[　　]（Formal schema）
14. 文章内容の理解を主目的としている。[　　]（Reading for meaning）
15. 文章内容をどの程度理解しているのかについて，心の中で把握している。[　　]（Monitoring comprehension）
16. 文章全体の内容展開について予測している。[　　]（Forward inferences）
17. 予測と実際の内容展開が異なる場合，その予測を見直している。[　　]（Modifying inferences）
18. 文章中の新たな情報から判断して，前に読んで理解できなかった箇所について推測している。[　　]（Backward inferences）
19. 文章全体の文脈から，知らない語句の意味を推測している。[　　]（Guessing meaning）
20. 文章全体の主題となる情報と，あまり重要ではない細かい情報を区別している。[　　]（Differentiating main ideas）
21. 文章全体から得られるさまざまな情報を心の中で整理している。[　　]（Organizing information）
22. 理解の難しい箇所を自分なりに判断して解釈している。[　　]（Interpreting information）
23. 読み終わったら，心の中で内容のまとめを行い理解の確認をしている。[　　]（Post-reading summarization）